
バカとリリカルとゴッドイーター

夜叉龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとリリカルとゴッドイーター

【Nコード】

N1971T

【作者名】

夜叉龍

【あらすじ】

やっちまった感120%！。でも後悔はしてません！。ゴッドイーターのキャラが！。リリカルなのはのキャラが！。明久達Fクラスの面子とどたばたやっちゃいます！。ちなみにカップリングは明久×瑞希。明久×美波ではありません。これらじゃなけりやだ。って方はバックしてください。

1 問 2 組の幼なじみ（前書き）

はいどうも夜叉龍です。 やったしまった感半端ないです。

ちなみに更新は亀です。感想お願いします。では！。

1問 2組の幼なじみ

文月学園 ― 科学とオカルトと偶然というわけの分かんない理屈で生み出された試験召喚システムを取り入れた学校。

その校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

その坂道を3人の男女が歩いている。

「ふわあ、眠い……。」

銀髪まじりの肩より少し長い黒髪をした少年―青葉 空が眠そうに欠伸をしながら歩いている。

「新学期前日まで夜更かしするのがいけないんでしょうが。自業自得よ。」

肩にかかる程度の長さの髪をした少女―木下優子があきれながら言う。

「空にも困ったものじゃな。大方ゲームが区切りよく終わらなかつたんじゃない?。」

独特の言葉使いをした優子に瓜二つの少年で彼女の双子の弟―木下秀吉が苦笑混じりに言くと、

「そうなんだよ秀吉。昨日パーティーのみんなが放してくれなくてよ。まあ、おかげでアルバ。リオンを結構討伐できたからいいけ

どな。」

空はからからと笑いながら返した。

「はあ、全くあんたは????????。」

優子はかなり深いため息を吐いた。

—————

「おはよう、木下姉弟、青葉。」

登校してきた3人に挨拶したのは浅黒い肌に短髪そして筋骨隆々とした男西村先生である。担当は生活指導。

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます、鉄??????西村先生。」

「まて青葉。お前今鉄人って言おうとしなかったか?。」

鉄人とは西村先生の生徒の間でのあだ名のことである。その理由は趣味のトリアスロンと冬でも半袖でいることから来ている。

「気のせいですよ、西村先生。ふわあ????????。」

空はまた眠たそうに欠伸をした。

「お前は????????。新学期初日からそれでどうする。」

西村先生が呆れまじりに言うと、

「すみません。後でアタシが言って聞かせます。」

優子が謝り、秀吉は苦笑を浮かべている。

「はあ、まあいい。それよりほら、お前達の振り分けだ。」

西村先生が箱から封筒を取り出し、3人に1つずつ渡した。

「むう、わしはFクラスじゃ。」

秀吉が自分の封筒の中身を見てうなづいた。

「アタシはAクラスよ。まあ、当然ね。?????????????」
空は?。」

優子は自分の結果に満足そうに頷き、そして空にふった。その目は同じクラスになることを期待しているように見える。

「ん。」

空が突き出した紙に書いてあったのは、

青葉 空 Fクラス

の文字だった。

「「な、なんで（じゃ）！？」。」

優子と秀吉が全く同じタイミングで叫んだ。それを見た空は双子のなせる技だなあ、と全く関係ないことを思った。

「な、なぜじゃ！？。なぜ空がFクラスなのじゃ！？。空の実力なら最低でもBはいくと思うておってたのに！」

「確かにそうなんだけど?????????。」

空が気まずそうに頭を掻いていると、

「空。まさかとは思っけど、寝落ちしたんじゃないでしょうね。」

優子が半眼で睨みながら言うと、

「あはははは?????????」名答。」

空は力無く笑うと肯定した。

「やはりか。」

秀吉はやれやれと言わんばかりにため息を吐き、優子は頭を抱えている。

「3人共いつまでもやってないで早く教室に行ったらどうだ？」

いつまでも動かない3人を見かねたのか西村先生が助け舟を出した。

「それもそうじゃな。行こう姉上。」

「????????ええ。」

「いや、優子、本当にごめん。」

そして3人はそれぞれ教室に向かって歩いていった。

それからしばらくすると木下姉弟と空が歩いた道を4人の男女が走っている。???????全速力で。

「はあ、はあ、遅刻したらアキ君のせいだからね!。」

そう言うのは茶髪をサイドポニーにした少女ー高町なのは。

「だからごめんて!。」

そうなのはに謝っているのは同じく茶髪の少年、吉井明久。

「だ、だいたいなんで玲さんの古いセーラー服があるの!?。」

そう言うのは金髪を下ろした少女ーフェイト?T?ハラオウン。

「知らないよ！。全部姉さんが持ち帰ったと思ったのに！」

「せやけどあつたやん！。ちゃんと確認ぐらいしといて！。というかちよつと取り出した時点で気づいて！。なんで3/1も取り出してから気づくん！？。」

明久の言葉に反論するのは明久と同じ茶髪の少女ー八神はやて。

この4人は小学校のころからの幼なじみだ。FFF団が見たら間違いない嫉妬に狂うだろう。

ちなみになぜ彼等が走っているかと言うと、遅刻しそうだからである。その理由はまずなのは、フェイト、はやてが明久を迎えに行ったが、明久は熟睡中。それを3人がかりで起こし、そして朝ごはんを食べ終えた後外で待ってたがなかなか明久が出てこず、様子を見てみると何故か彼は姉の吉井 玲のお古のセーラー服を取り出し、それを3人で慌てて止めていたらこうなったのだ。

「遅刻だぞ！。吉井、高町、ハラウン、八神。」

登校してきた4人に告げたのは木下姉妹と空の時と同じ西村先生だった。

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます。鉄?????西村先生。」

「おはようございます。鉄じ?????西村先生。」

「まて、吉井と八神は鉄人と言おうとしなかったか?。」

「気のせいですよ。西村先生。」

「アキ君の言う通り気のせいや。西村先生。」

「ん、そうか?。」

なんとかごまかせたー、と2人は内心はあ、とため息を吐いた。

「それより普通におはようございますじゃないだろ。」

「あ、遅刻してすみません。」×2

「えーと?????今日も肌が黒いですね。」

「えーと……今日も暑苦しそうですね。」

「?????????吉井と八神には遅刻の謝罪よりも俺の肌の黒さと暑苦しさの方が重要なのか?。」

「すみません、すみません。」×2

なのはとフェイトがぺこぺこと頭を下げている。

「まったくお前は????????? まあいい。それよりほら受け取れ。」

そう言うとき西村先生は箱から4枚の封筒を取り出し、4人に渡した。

「それにしてもどうしてこんな面倒なやり方でクラス発表するんですか?。掲示板に大きく張り出しちゃえばいいのに。」

明久が素直に思った疑問を口にした。

「普通はそうするんだがウチは世界的にも注目されているシステムを導入した試験校だからな。このやり方もその一環ってワケだ。」

ふーんと明久は頷いた。

「それにしてもハラオウンは残念だったな。ちゃんとテストを受けていればAクラスに行けたのに。」

「いえ、体調管理を怠った自分が悪いですから。」

フェイトは封筒を受け取り、言う。

「そうか。所で高町に八神。なんか2人のテスト用紙は完全な空欄だったんだがどうしたんだ?。名前すら書いてなかったぞ。」

その言葉になのはとはやては視線をさまよわせる。

「え、えっと??????前日に一生懸命勉強やってたらほぼ完徹になっちゃいまして??????」

「え〜と私もなのはちゃんと同じで????????。」

「はあ。つまり寝てしまったのか。」

西村先生が深いため息を吐いた。

「ははは、まったく2人は?????。頑張るのはいいけど、
ほどほどにしないと。」

明久は苦笑を浮かべながら言う。

その顔を見て2人は思わず顔をそらした。言える訳がなかった。
明久と同じクラスになりたいがために白紙にしたなど。

「あとそれから吉井。」

「はい?。」

「これは俺個人の意見だがお前のやった事は人間として誇れるもの
のだ。胸を張れ。」

「?????????はい!。」

明久は笑顔で頷いた。それを見て事情を知っているのは達も笑顔
になった。

そして4人は封筒を開け中身を改めた。

吉井明久 Fクラス。

高町なのは Fクラス

フェイト？T？ハラオウン Fクラス

八神はやて Fクラス

彼等の最低の学園生活が始まった。

1問 2組の幼なじみ（後書き）

ゴッドイーターのキャラオリしか出てねー！！。次回は設定を書きます。

これもゴッドイーターぐらいみなさんに読まれたらいいなあと思います。では！。

第2問 O H A N A S H Iと自己紹介（前書き）

本当は設定に行きたかったんですが、ゴッドイーターのキャラがほとんど出てないのでこれにしました。これまでに無いくらい駄文ですがどうぞ！。

第2問 OHANASHIと自己紹介

「????????何だろう、このバカでかい教室は。」

「教室をこんなに大きくする必要ないよね????????。」

「だよね。もうちょっと小さくてもいいよね????????。」

「格差社会が目のあるわ????????。」

4人が去年ほとんど行ったことのない3階に行きますまず目にしたのは普通の5倍はあろうかというAクラスの教室だった。

4人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性――学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、高橋先生だ。」

「やっぱりあの人が担任なんやな。」

フェイトとはやてが揃って言う。

一方明久となのははAクラスの設備に目を向けていた。

「ねえ、あれ！。冷蔵庫とエアコンが個人である！。」

「ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！。」

そのあまりの設備に2人は度肝を抜いていた。

「私、Aクラスじゃなくてよかったかも。」

フェイトがポツリとつぶやいた。

「かもね。フェイトだったら逆に緊張して勉強出来なくなるかもね。」

明久が苦笑をしながら返した。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来ててください。」

「????????はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女―霧島翔子だった。

「ねえ、3人はあの噂ってどう思う?。」

「噂ってあれ?。霧島さんは同性愛者っていうやつ。」

「うん。それ。」

翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきたが、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。

「ちがうんじゃないかな。」

フェイトが否定した。

「そう?。」

「もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないよ?。」

「そつか?????。もし、そうならその男の子は幸せだね。霧島さんみたいな美人に想いをよせられて。」

明久の言葉に3人はうん、と頷いた。

「それじゃあ私達も行こっか。」

なのはの声に3人共頷き、Fクラスの教室に歩き出した。

「アキ君。私達いつのまに山奥にきちゃったの?。」

「なのは。現実逃避したくなる気持ちは分かるけどちゃんと見つめようね。」

今彼等が目になっているのはとても教室とは思えない、それこそ山奥の山小屋のような教室だった。

「これは??????? Aクラスとは真逆の意味ですごいね。」

「これが勉強する環境なんやろか。」

そのあまりのひどさに4人は絶句していた。

「と、とりあえず中に入る。きっと外よりはマシだよ。」

いつまでも突っ立てはまずいと思ったのか明久が切り出した。

「そ、そうだね。外見だけだね。中は少なくともちゃんとしてるよね。」

「そうだよな。ちゃんとしてるよね。勉強する所だもんね。」

なのはフェイトがうんうんと頷く。

「それじゃあ私が先陣きらせてもらっわ。」

そう言うとはやては教室の戸を開け、

「すいません。ちょっとおくれ」遅いぞウジ虫やる??????
「は?。」

入って初めてかけられた言葉は凄まじい罵声だった。

「え!?! いや、すまん!。明久だと思って勘違いして「アキ君をウジ虫呼ばわり?。」へ?。」

その声にツンツンと立った短髪の少年で先ほどはやてに罵声を浴びせた少年―坂本雄二はその方に目を向けた。

そこには魔王と悪魔がいた。

「ふゝん。はやてちゃんを会い頭にそう呼んでさらにはアキ君をそんなふうと呼ぶんだ坂本君は。」

「これはちよつとOHANASHIする必要があるよね。」

なのはとフェイトはにこりと笑みを浮かべている。目は一切笑っていないが。ちなみにはやては突如の罵声にうなだれ、明久がよしよしとなくさめている。

「ち、ちよつと待ってくれ！。言い過ぎた。俺が悪かった！。だから????????あ、明久！。助けてくれ！」

2人の尋常ではない殺気にたまらず雄二は明久に助けを求める。

「2人とも。」

明久がはやてをなくさめながらなのはとフェイトに話かける。

「なに?。」

2人はいくらか殺気を収め振り返る。

「ほどほどにね。」

明久の口から突き放す言葉が飛び出した。

「「うん、分かった」。」

「待て明久！。見捨てるな！。」

雄二は必死に明久に助けを求めるが、

「ごめん雄二。今の2人を止めることは僕にも出来ないよ。」

と明久は言った。実際自分に向けられてないのに明久は冷や汗がナイアガラと滝のように流れていた。

「じゃあOHANASHIしよつか。坂本君」。

なのはがゆつくりと雄二に近づいていくと、

「すいません、ちょっと通してもらえますか？。」

背後から声をかけられた。

そこには寝癖付きの髪にヨレヨレのシャツを着たおじさんが立っていた。

「席についてもらえますか？。HR始めますので。」

「はい分かりました。」

「はい！。（た、助かったー。）」

「「はい。（残念。）」「」

「?????はい。」

5人はそれぞれ席に向かう。

「え、担任の福村慎です、よろしくお願いします。」

教壇に立った福村先生は自己紹介をし、黒板に名前を書こうしたがその手を止めた。理由はチョークがないからである。

「皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますか？。不備があったら申し出て下さい。」

「これで不備がないって言う人に会ってみたいよ。」

「にやははは。私も同感。」

明久が呟くと後ろのなのが同意してきた。

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

もちろんそれに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

スクツ。「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

次はその前の少年が立った。

「青葉空だ。趣味はハンティングゲームと昼寝。秀吉とは幼なじみだ。その姉貴の木下優子共な。」

「『異端者には死を！』」

空の言葉にFクラスの面子の大半がカッターを構えたが、

「言つとくが俺は近くの空手道場で師範のバイトをしている。鳩尾に正拳くらいたかつたらこい。（ゴキッ）」

「『すんませんでしたー！！』」

空が言い放ち手の骨を鳴らすと全員謝った。

それを見て空は座った。

「空、ああ言つふうに言わんでも。危険人物と思われるぞ。」

秀吉が空に話しかけると、

「しかたねえじゃん。ああしねえと俺はカッターダーツの的にされてたんだぞ?。」

空の言葉に秀吉は苦笑した。

「????????土屋康太。」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年―土屋康太だ。彼はムツリ―ニというあだ名を持っているが本名よりもそっちの方が知名度が高い。

しばらく自己紹介が続き次に立ったのは明久より濃い茶髪の少年。

「藤木コウタだ!。よろしく頼むぜ!。趣味はアニメ鑑賞だ。」

と元気が歩いているような少年―藤木コウタだ。

そして次に立ったのは、

「アリサ?イリーニチア?アミエーラです。ロシアから2年前に来ました。よろしく願います。」

淡い色の髪を伸ばした美少女―アリサ?イリーニチア?アミエーラだ。

「あつ、ちなみにコウタとは中学の同級生です。」

「おいアリサ!。それ言う必要がある???危ね!。」

コウタが避けた瞬間畳に多くのカッターが突き刺さった。

「ちよつと待てお前ら!。マジで当てるつもりだったろ!?。」

コウタが冷や汗をかきながら言うが、

「『だまれ!。異端者!。』」

Fクラスの大半の面子は第2射の準備をした。が、

「みなさん喧嘩は止めてください。」

福原先生に止められ全員とりあえず引っ込めた。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味はー」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、

「吉井明久を殴る事です。」

と言った。

その瞬間なのは、フェイト、はやてはきつ、と美波を睨みつけた。

「な、何?。」

突然の事に美波はうろたえる。

「別に????????。」

「ただ、最低な趣味だと思っただけ。」

「その通りや。」

3人はただそれだけ言うと視線を外した。

「3人共どうしたの?。」

状況がよく分かっていない明久が聞く。

「ううん、何でもないよ。」

「大丈夫だから気にしないで。」

「アキ君が気にすることは何もあらへんよ。」

3人はそれぞれ笑顔で言った。

「???????です。よろしく。」

今度は明久に回ってきた。

「ーコホン。えーつと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね。」

次の瞬間、

「ーダアアーリーーン!!。」

野太い男の大合唱。

「????????失礼、忘れてください。とりあえずよろしく

お願いします。」

明久は吐きそうな顔で座る。

「アキ君?????。」

流石のなのはもこれはきつかったらしく明久に非難の眼差しを向ける。後ろのフェイトとはやてもジト目である。

「ごめん。後なのは、次だよ。」

明久は振り返って謝り、なのはを促した。

「うん。」

頷いてなのはは立ち上がった。

「高町なのはです。明久君、フェイトちゃん、はやてちゃんとは幼なじみです。」

「「「吉井を?????。」」」

「ちなみに明久君に危害を加えたらOHANASHIですからね。
(ニコッ)」

「「「Y、Yes Sir!」」」

なのはの目が笑っていない笑顔に全員恐怖を覚えた。

「フェイト?T?ハラオウンです。ちなみに私も明久君になんか

やったらOHANASHIしますの。特にM？Sさんには目を光らせておきますの。」

フェイトはそう言うところりと美波に視線を向けた。

「八神はやてです。私もなのはちゃん達を似たようもんや。あ、でも坂本君にはさっきの件でOHANASHI決定やからな。」

はやては雄二に目を向ける。

「いや本当にすまん！。頼むからOHANASHIは勘弁してくれ！。この通りだ！。」

雄二が必死に謝っていると、

「あの、遅れて、すいま、せん。」

「「「え？。「「「

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

第2問 O H A N A S H Iと自己紹介（後書き）

これで主要キャラはほとんど出ました、ゴッドイーターにはもう数人キャラがいますがそれは後ほど。感想待ってます。次こそは設定です。では！。

設定！。
(前書き)

やっとこさ投稿できました。とりあえずこの設定を崩さないように
行きたいです。

では！。

5 / 3 0 フェイトの点数変えました。よく考えたら化け物すぎ
ました。

設定！。

ゴッドイーターサイド

青葉 空くあおば そら>

身長 172cm

外見 フェイスエディット1で髪は肩まで届く長さ。色は黒だが所々に銀髪が混じっている。

趣味 昼寝 ゲーム（特にハンティングタイプ）

成績 生物以外180〜220程。生物410〜420

木下姉弟とは幼なじみの少年。性格は幾らかマイペースな所があるが基本面倒見がいい。ボケは基本せず、ツツコミをしていく。勉強は真面目に取り組むが眠気には絶対勝てず眠いと思った直後には落ちている。だが歩いている時はさすがに寝ない。Fクラスに入った理由は寝落ち。

酒に極端に弱く、ほんのちよつとでも飲んだらまるで別人のように凶暴化し暴れる。

1年前から両親が仕事で海外に行ってるため1人暮らし。家事は普通にこなせ、料理は人並み以上にうまい。

空手を4歳からやっており、今では自分が学んだ道場で師範バイトをする程の腕前。

秀吉は空を親友として兄貴分として頼りにしている。優子は彼と何かと張り合うが好意を寄せている。

召喚獣

F制式上衣と下衣。色はコバルト。

新型神機 銃身 ヤタガラス真 刀身竜殺し 炎獄 装甲 剛炎
タワー真

腕輪 ブラッドレイジ 螺旋を描く紫の炎を放つ。一撃で50点消費する。また、消費する点数を増やすことで威力と範囲を上げる。100点 Lv1。200点 Lv2。400点 Lv3。Lv3の時は範囲はBクラスの教室半分。威力は教師の召喚獣を一撃で消せる。

藤木コウタ

家族は両親と妹。ただし父親は単身赴任で家にいない。

アリサとは中学校3年の時同じクラスだった。

成績 全科目50～80点。

召喚獣 アリーキャットに旧型神機。銃身 モウスイブロウ

腕輪 拡散型ミサイル。4発のミサイルを放つ。一回で70点消費。空と同じように消費点数を増やすことで、ミサイルの数を増やす。Lv1消費点数140点。6発。Lv2消費点数230点。

8発。 L V 3消費点数320点。 10発。

アリサ？イリニーチエア？アミエーラ

中学3年の時にコウタの中学校に転校してきた。両親は健在だが、今は仕事でロシアに帰っている。

Fクラスに入った理由は風邪で試験を休んだため。

成績 世界史と古典以外220～240。世界史400点代。古典30点代

召喚獣 ミューティニアに新型神機。銃身 レイジングロア。刀身 アヴェンジャー。装甲ブルムストーン

腕輪 ホーミングレイ。敵を追尾する5本のレーザーを放つ。1発60点。消費点数を増やすことで本数と威力を増す。 L V 1。消費点数150点。本数9本。 L V 2。消費点数240点。本数12本。 L V 3。消費点数310点。本数15本。

リリカル側

高町なのは

明久とは赤ちゃんの頃からの付き合い。3人の中で一番付き合いが長い。今ではいざという時に目で意志を通じあえる。

幼稚園の頃から明久の事が好きで家族のみなさんも明久だったからと言っている。

Fクラスに入った理由は明久と同じクラスになりたいがために白紙にしたから。

成績 数学以外110→130点。数学200→240点。

召喚獣 バリアジャケットにレイジングハート

腕輪 砲撃。消費点数300点。極太の砲撃を放ち斜線上をなぎ払う。つまりスターライトブレイカー。

フェイト？T？ハラオウン

小学校の頃に明久となのはの学校に転校してきて、なのはと知り合いそこから明久とも仲良くなった。

なのは同様明久に好意を寄せている。

Fクラスに入った理由は試験を風邪で休んだため。

成績 世界史以外200点代。世界史500点代。

召喚獣 バルディッシュにバリアジャケット。

腕輪 ザンバーフォーム。バルディッシュを大剣に切り替える。消費点数60点。一度切り替えるとそのままの状態になる。

八神はやて

フェイトの後に明久達の小学校に転校してきた。

明久とは親友のような関係で実はとりたてて特別な好意は持っていない。

恋はどちらかというと応援するほう。今はなのはとフェイトの恋を応援している。

Fクラスに入った理由は明久と一緒にの方が楽しくなりそうだからと白紙で出したため。

成績 全科目130〜140

召喚獣 シュベルトクロイツにバリアジャケット。

腕輪 砲撃。消費点数300点。なのはの砲撃に似た一撃を放つ。
ただしこちらは範囲は広いが威力が低め。

バカテス側

明久は原作よりちょっと頭が良くなり、召喚獣が原作8、9巻の
になってます。

明久の強さが上がってます。恐らく雄二とタイマンはれるかもしれませんが。（理由、なのはの家の道場に通ってたからです。ちなみになのは達も明久にくっついてやってたため結構強いです。）

明久は姫路にとりたてて恋心は抱いていません。友達として見えます。

優子の性格が丸くなっています。

設定！。
(後書き)

こんな感じでいきます。ちなみに他のみなさんは原作沿いの性格ですが展開で変わっていくかもしれません。ちなみに重苦しいタイプの設定は全部取っ払ってます。ではまた次回！。

第3問 戦争の引き金（前書き）

本当に亀更新ですいません。

仕事が忙しすぎます。

ではどうぞ！

第3問 戦争の引き金

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそうだろう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。しかしその中で明久、なのは、フェイト、はやては冷静だった。彼女がここに居る理由を知っているからだ。

「ちようどよかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします?????」

福原先生に促され小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持った少女ー姫路瑞希は自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると1人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいますか？」

聞き方によつては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない。

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだろう。

「そ、その???????振り分け試験の時に高熱を出してしまいまして????????」

この学園の試験は途中退席した場合再試験もなしに0点扱いになっ
てしまう。

するとそこかしこでなにやら言い訳の声が上がり始めた。

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ？あれはむずかかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくて。」

「「「異端者には死を!!!!」」」

「すんません！嘘つきました！」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしく願います！」

そう言つと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。

「き、緊張しました〜」

そう言って瑞希が卓袱台に突っ伏すと、

「瑞希ちゃん、久しぶりだね。」

「瑞希も同じクラスなんだね。」

「いやゝ奇遇やね。」

なのは達が声をかける。どうやら瑞樹がここに来た理由は知らない事にするらしい。

「え！？なのはちゃんにはやてちゃん、フェイトちゃんまで！？
どうしてここに！？」

驚きを隠さず瑞希が聞くと、

「私は試験を風邪で休んじゃってね。」

「私は……………ちよつとね。」

「私も……………ちよつとな。」

3人はそれぞれの反応で返す。

「あのさ姫「姫路」……………」

話が一区切りついたところで明久が声をかけたが雄二がかぶせるように声をかける。

「は、はい。何ですか？え」と・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしく願いします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ところで瑞希ちゃん。体調の方は大丈夫なの？」

「あ、それは僕も気になる。」

なのはが声をかけると明久もかけた。

振り分け試験の時明久は瑞希の隣の席に座っており、倒れた時は保健室まで付き添ってあげていた。

「よ、吉井君！？」

明久を見て瑞樹は驚いたように声を上げる。

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな！目もパッチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！」

「せやな。少なくとも女の子を出会いがしらにウジムシ呼ばわりするだれかさんよりかはイケてるなあ。」

はやてが雄二を見ながら言う。どうやらそうとう深いキズを負っ

たらしい。

「うぐっ……ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういえば俺の知り合いにも明久に興味を持ってる奴がいたな。」

「え、それって誰「それって誰ですか!?!」」

明久を遮って瑞希がすごい勢いで聞いてくる。

「確か久保——」

「久保?」

「利光だったかなあ。」

久保利光——♂（性別 オス）

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

「もう僕お婿に行けない。」

その明久をお返しというようにはやてがよしと慰める。

「安心してアキ君。いざとなったら私が貰ったげるから。」

「「「はやて（ちゃん）!?!」」」

はやての発言になのは、フェイト、瑞希は仰天した。

「冗談やて3人共。私にとってアキ君は親友やてことは分かって

るやろ。」

はやてはからからと笑った。

「はいはい。その人達静かにしてくださいね。」

福原先生が教卓を叩いて注意をする。

「あ、すいませ……。」

バキッ（教卓が碎ける音）

バラバラバラ（破片が崩れる音）

教卓がゴミ屑になった。

「えゝ替えを用意してきます。少し待っててください。」

そう言つと福原先生は教室から出て行つた。

それを見た明久は何か考え込むと、

「……雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ？」

暇になったから欠伸をしている雄二に明久が声をかける。

「ここじゃ話にくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

2人は立ち上がって廊下に出る。それを空はちらりと見ると、自らも立ち上がった。

「んで話つて?。」

廊下に出た所で雄二が切り出した。

「この教室のことなんだけど、何だ?何の話すんだ?。」って空君
!?。」

明久が話そうとした所で空が割り込んできた。

「空でいいよ。ささ、続けて。」

「う、うん。で雄二この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「空もそう思うでしょ?。」

「そうだな。こいつはあまりにもな……。」

「でAクラスの設定は見た?。」

「ああ、凄かったな。あんな教室は見たことがない。」

「それ以前にあれば教室の括りに入るのか？ここもそうだけどさ。」

空がどこか呆れたように言う。

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」

「いきなりAクラス相手にか！？」

空が驚いたように声を上げる。

「……何が目的だ。」

雄二が警戒するように目を細め明久を見る。

「2人の前じゃ誤魔化しても意味ないと思うから素直に言っけど、理由は姫路さんとはやての為だよ。」

その言葉に空はん？と首を傾げた。

「なあ、明久。姫路は体が弱いからと分かるが八神は？」

「ああ、はやても子供のころ体が弱かったんだ。」

「本当か？」

「うん。今はもう大丈夫だけどこの環境だとまた具合悪くしちゃ

いそうなんだよね。」

なるほどと2人は頷いた。

「雄二いいんじゃないか？なかなかおもしろそうだしよ。」

空が口元に笑みを浮かべながら言う。

「お前は戦闘狂かよ。まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思ってた所だ。」

「え、どうして？」

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

「????」

「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

そう言うと雄二は教室に入っていく。

「ねえ空。どういう意味？」

「さあ？俺にも分かん。」

空は肩をすくめ、2人は教室に入っていた。

そしてそのまま自己紹介は特に問題なく進んで行き、

「坂本君。キミが自己紹介の最後ですよ。」

「了解。」

雄二の番になり、雄二は教卓に上がった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。所で皆に一つ聞きたい。」

そう言つと雄二は視線を巡らせた。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

「……大ありじゃあつ!!!!!!」

Fクラス魂の叫びである。

「だろう？俺だつてこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが……FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。

第3問 戦争の引き金（後書き）

意見感想お待ちしております。

第4問 勝てる要素（前書き）

やっとこさ書きあげました。本当に時間かかる。仕事が忙しすぎます。

では駄文ですがどうぞ！

第4問 勝てる要素

「勝てるわけがない。」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

「姫路さんがいれば何もいらない。」

「なのはさんと付き合いたい。」

「フェイトさんとイチャつきたい。」

「はやてさんとエロ談義したい。」

「アリサさんに蔑まれたい。」

「おい！最後の方全く関係ないことばっかじゃねえか！個人願望だし！」

「アタシそんな趣味持つてませんよ！？」

クラスのところどころから悲鳴が上がる。その中に紛れ込んでいたおかしなものには空とアリサがツッコんでいた。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

「何をバカな事を。」

「できるわけないだろう。」

「何を根拠にそんな事を。」

雄二の宣言に全員がそんな声をあげる。そんな声があがるのも無理はないだろう。実際AクラスとFクラスの戦力の差は歴然だ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争に勝つことのできる要素が揃っている。今からそれを証明してやる。」

そんな雄二の言葉を聞きクラスの中がざわめく。

「おい康太。畳に顔をつけて姫路と高町とハラオウンと八神のスカートを覗いてないで前に来い。」

「……………!!(ブンブン)」

「は、はわ。(にや!いつに間に!?) (わわわわ。(ふつ、甘いで土屋君)」

康太は顔に畳の跡を手で隠しながら壇上に立った。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ。」
ムツッリーニ

「……………!!(ブンブン)」

ムツッリーニ。それは男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を持って呼ばれている。

「ムツッリーニだと……………?」

「馬鹿なヤツがそうだというのか？」

「だが見るあそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いる……」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ。……」

ちなみムツツリとはムツツリスケベって意味なのだが瑞希は分からないのか頭に????を浮かべていた。

「姫路の事は説明することもないだろう。皆だってその力をよく
知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している。」

確かにそうである。彼女は学年2位の實力だ。戦争でこれほど頼
りになる戦力はないだろう。

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった。」

「彼女ならAクラスに引けをとらない。」

「彼女さえいれば何もいらない。」

「おい！最後のヤツまったつく関係ねえだろ！いいかげんにしろ
！」

瑞樹へのラブコールに空がツッコむ。

「木下秀吉だっている。」

「うんむ？わしかの？わしよりも空の方が頼りになるぞ。何と言ってもAクラスに入れる実力じゃからな。」

「何だつて？」

「本当なのか？青葉。」

「おう」

周囲の質問に空は特に謙遜も何もせずに言い放った。

「それにハラオウンもいる。こいつもAクラス入りの実力だからな。」

「そうだ。フェイトさんもいた。」

「フェイトさんと付き合いたい。」

「ちょっと待ってください！また関係無いの混ざりましたよ！」

「こんどはアリサがツツコむ。どうやらこの2人はボケにどうしても反応してしまうらしい。」

「おゝゝいアリサもAクラス並みの実力だぜゝゝ」

「ちょっ！コウタ！」

「本当か！？」

「当然俺も全力を尽くす。」

「坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか。」

「実力はAクラスレベルが5人もいるってことだよな！」

教室内の士気は確実に上がっていったが、

「それに吉井明久だっている。」

その一声でクラス内の士気は一気に下がった。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

「誰だ吉井明久って。」

「聞いたことないぞ。」

「ホラ！折角上がりかけていた士気に陰りが見えてるし！……って、なんでみんな僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないよね！？」

「知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きはく観察処分者だ。」

「……………それってバカの代名詞じゃなかったか？」

クラスの誰かが致命的な台詞を言った。

「ちっ、違うよ！ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で。」

「そうだバカの代名詞……………ちよつとまで高町にハラオウンに八神。そんな目で俺を睨むな。話はまだ終わってないから。」

雄二がバカの代名詞と言った瞬間3人は殺気を込めて睨みつけていた。

「さて続きはと言うのは明久は実質的にFクラスの2番目の戦力だということだ。」

「何！？」

「それはということだ！？」

クラスの中からそんな驚きの声があがる。

「説明するとだな、観察処分者の召喚獣は物理干渉が出来る。そのかわりにフィードバックで召喚獣が受けたダメージや疲れが本人にもいくらか反映される。」

「おいおい。それっておいそれと召喚できないんじゃないか？」

「そうかもしれん。だが利点もある。明久はたびたび教師の雑用に駆り出されて召喚獣を使っている。おかげで扱いに慣れているんだ。だから俺たちは大雑把な攻撃や回避しかできないが明久は体をずらしての回避や相手の攻撃に合わせてのカウンターとかができるんだ。」

「おお・・・」

「それはかなり有利になるんじゃないか？」

「そういうことだ。とにかく、俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆この境遇は大いに不満だろう？」

「当然だ！」

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！」

「おおーーーー！！！」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！システムディスクだ！」

「うおおーーーー！！！」

「お、お・・・・・・」

「へへ、どうなるのかな。」

クラスメイトの勢いに瑞希は完全に吞まれ、コウタは楽しそうな顔をしている。

何はともあれ彼らの戦いは始まった。

第4問 勝てる要素（後書き）

説明が難しすぎます。文才が欲しいです。ではまた次回！

第5問 最強のクラス（前書き）

結構早めに投稿できました。

そして今までで一番長いです。

ではどうぞ！

第5問 最強のクラス

「明久。Dクラスの宣戦布告の使者になってこい。無事大役をはたせ。」

「……下位クラスの使者は大抵ひどい目にあうはずだね。」

「いやお前の場合それはない。むしろDクラスの連中がひどい目に合う気しない。」

「うーん、まあいつか。分かったよ。それじゃあ行ってくる。」

そう言うとき明久は教室を出て行った。

「なあなあ坂本。吉井って強いのか？」

いまのやりとりを聞いたコウタが聞くと、

「ああ、そうだ。前に一度本気で喧嘩した事があったんだが俺と互角にやりあったからなあ。」

雄二は遠い目をしながら言った。

「当然だよ。アキ君は私の家の道場に通ってたんだから強いに決まってるじゃん。」

なのはが自分の事のように胸を張る。

「ちなみに私たちもアキ君の付き添いで顔を出している内に少しやってね、アキ君程じゃないにしろ強いよ。」

「そのとおりや………所で坂本君はまたアキ君を………」

「いやまて！確かに俺は明久を指名したが最終的にあいつ本人が行ったぞ！」

「関係あらへん。さっきの件も含めてOHANASSIを「ただいま」あ、おかえりや、アキ君。」

雄二にはやてがOHANASSIしようとした所で明久が帰って来てはやてはそちに気がそれた。

（助かったー！しかしこのままではちょっとした拍子にOHANASSIされちまう。なんとかしないと。）

雄二がそんなことを考えている中なのは達は明久のほうに駆け寄った。

「大丈夫アキ君？どこかけがとしてない？」

「ああ、うん。大丈夫だよ。」

「にしても早かったね。攻撃されなかったの？」

フェイトが聞くと明久はいくらかバツが悪そうに鼻を掻いた。

「いやそれが、宣戦布告と同時に一人攻撃してきたんだけどその人に思いつきり回し蹴りぶち込んだじゃって。それでその人が机をまきこみながら吹っ飛んで行ったの見て他の人達はあっさり受けてくれたんだ。あの人には悪いことしちゃったなあ……」

その言葉に教室の中全員（なのは、フェイト、はやて、空をのぞく）が戦慄を覚えた。

「さて、それじゃあ今からミーティングを行っぞ。」

そう言つと雄二は教室の外に出て行った。どうやら別の場所で行うらしい。

その後を空とコウタと秀吉とアリサ瑞希となのはとフェイトと美波と続く。

「……………（サスサス）」

さらに頬の辺りをさすりながら康太が続く。

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の後なら消えてるよ?」

「……………!!（ブンブン）」

明久の指摘に康太は勢いよく首を振った。

「いや、今否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから。」

「……………!!（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う。」

「……………!! (ブンブン)」

「ちなみに何色だった？」

「みずいろに白に黒……………そしてスパッツだった。」

最後の方はくやしそうに康太は言った。

「スパッツははやてだね。まあ、彼女もムツリニ並にエロだから考えが読まれてたんだね。それじゃあ行こうか。」

そう言うつ明久は教室を出てそれに康太も続いた。

メンバーは屋上に集合していた。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。春風で瑞希のスカートがはためきそれを康太は注視している。それを見たアリサは小声で「ドン引きです。」と呟いた。

「明久。宣戦布告はしてきたな。」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど。」

雄二がフェンスの前の段差に腰を下ろし明久達はおのおの腰を下ろした。

「それじゃあその前にお昼ですね。」

「そうだね。アキ君、お弁当作って来てくれた？」

「もちろんだよなのは。そういうそっちは？」

「忘れてないって。大丈夫。」

明久となのはがそんなやりとりをしていると、

「なのは！いつの間にお弁当交換の約束してたの！？」

「ずるいわ！私もアキ君のお弁当食べたかったのに始業式やから次の日の楽しみに我慢したのに！」

フエイトとはやてがそれぞれ大声を上げた。

「ちよつと吉井！どういう・・・まってなのはさん。頸動脈から手を放して。」

「その前にアキ君に襲いかかろうとしないでね。」

明久に襲いかかろうとした美波は即座になのはによって頸動脈を掌握されていた。その後引き下がったのでなのはも手を放す。

「？？ということだ？」

お弁当の件を不思議に思ったのかコウタが聞いてきた。

「ああ、僕は普段は自分で自分のお弁当作ってるんだけどときどき約束した人2人が互いの分のお弁当を作ってくるんだよ。」

「ほう、それはおもしろそうじゃな。空、わしらもやってみんか？」

「ん？ん？ん？ん？ん？、まあそうだな。お前らの料理の腕前の確認もかねてやるか。」

空の言葉に秀吉はお手柔らかに、と苦笑していた。

「本当か明久？お前一時塩と水と砂糖で生活しなかったか？」

「本当ですか？よく生きて来れましたね。」

その事実にはアリサがあきれたような声を出す。

「あ~~~~まあ、そうなんだけど・・・・・・3人にOHAN ASIされちゃったからね。」

明久が遠い目で空を見上げると全員が心から同情した。幼馴染3人はその時の事を思い出しやりすぎたかなあと思った。

「あ、あの、良かったら私もお弁当作ってきましようか？」

「」「え？」「」

いままで黙っていた瑞希が突然そんなことを言うてきた。

「え？本当姫路さん。」

「はい。ご迷惑でなければ。」

「やった！お昼のメニューが増えた！」

明久はガッツポーズを小さくガッツポーズしている。それをなのはとフェイトは複雑そうな顔で見ている。

「……ふーん。瑞希って随分優しいのね。吉井にだけ作ってくるなんて。」

「あ、いえ皆さんにも……」

美波がおもそろくなさそうに言つと瑞樹はそんなことを言った。

「俺たちもいいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら。」

「そんじゃあお言葉に甘えるか。」

「そうですね。断るのも悪いですし。」

アリサの言葉に全員が頷いた。

「分かりました。それじゃあみんなに作ってきますね。」

こうしてその場にいた全員に死亡フラグが立ったがそれはまた別の話。

「なあなあ話が結構それてるような気がしてんだけどさあ。俺たちもともと試召戦争の話するためにきたんだろ。」

コウタが頭の後ろで腕を組みながら言うと全員が話を思い出した。

「雄二。一つ気になってたんじやがどうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし勝負に出るならAクラスじゃろ。」

「そういえばそうだね。」

「まあな。当然考えがあつてのことだ。色々理由はあるんだがとりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ。」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

明久が訳が分からないというように聞く。

「明久。自分の周りの面子をよく見てみる。」

「え〜と……」

明久はグルリと自分の周りの顔を見て、

「うん。幼なじみが3人に美少女が3人にバカが3人にムツツリが1人にツツコミが1人いるね。」

と結論づけた。

「誰が美少女だと!？」

「いやまて!雄二が美少女に反応っておかしいだろ!？」

「……………(ぼっ)」

「おい————!土屋まで反応しやがった!っっていうかツツコミ
って俺か!?俺の事なのか!？」

これだけの量のボケを一人でズバズバとさばく空はツツコミの名
に恥じないであろう。

「気を取り直して。まあ、要するにだ。姫路に空にハラウンに
アミエーラに問題がない以上まともにやりあってもEクラスには勝
てる。」

「なるほどね。少しでも手強い相手と戦って勝って士気を上げよ
うってわけだね。」

「そういうことだ高町。話が早くて助かる。それに打倒Aクラス
に必要なプロセスだ。」

雄二が腕を組んで説明した。

「でもそれってDクラスに勝てないと話にすらなりませんよね。」

「そんなことはないさ。」

アリサの心配を雄二は笑い飛ばした。

「お前たちが協力してくれるなら勝てる。ウチのクラスは――
――最強だ。」

その言葉に全員が笑みを浮かべた。

「いいわね。おもしろそうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかのう。」

「……………(グッ)」

「が、頑張ります。」

「よっしゃー!んじゃあやるかあ!」

「全力全開で行くよ!」

「私も思いつきやるからね。」

「暴れるでえー!」

「よし。それじゃあ作戦を説明する。」

そう言つて雄二は勝利のための作戦を説明し始めた。その中で明久は、

「それにしてもまさかこんなに早く勝負できるかもしれないなん

てね。・・・絶対Aクラス戦まで負ける事はできない。」

と小さく呟っていた。

第5問 最強のクラス（後書き）

明日からはゴッドイーターの方に集中しようと思うのでまた更新は遅れます。

ああ〜明日から夜勤ですよ。昼夜逆転ですよ。ツライですよ〜。

でも頑張りたいと思います。では！

第6問 Dクラス戦パート1（前書き）

はい、今回はDクラス戦第一回目です。

今回はコウタが頑張ります。

ではどうぞ！

第6問 Dクラス戦パート1

「藤木！木下達が渡り廊下でDクラスの連中と交戦状態に入ったわよ！」

こちらに走ってくる美波を見てなんか女らしさがたりないよなあとコウタは思った。彼から見ても美波はかわいい方だと思うし足も長くスタイルがいい。

なんだろうと考え、

「あ、そうか。胸が無いんだ。」

「アンタの指を折るわ。小指から順番に全部きれいに。」

「うわ！ごめん！いやすいませんでした！」

コウタはまるで土下座をするかのような勢いで謝る。

今戦闘を行っているのは秀吉が率いている先攻部隊だ。コウタと美波は中堅部隊にいる。

どういう状況か確認しようとコウタが耳を澄ますと、

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補修室だけは嫌だ！」

「黙れ！捕虜はこの戦闘が終わるまで補修室で特別講義だ！終戦

まで何時間かかるか分からんがたつぷり指導してやるからな。」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補修が終わる頃には趣味が勉強。尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立てあげてやろう。」

「イヤだ！イヤだ！いやー（ボタン、ガチャ）」

そんな声が聞こえてきた。どう考えても悪質な洗脳だろうとコウタは思った。

「島田、中堅部隊全員に連絡。」

「なに？何を伝えればいいの？」

「全員絶対死ぬな。死にそうになったら全力で逃げていいからって。」

「ええ、わかったわ。」

そう言つと美波は伝言しに行った。

コウタとしては今すぐにでも逃げ出したいのだが、彼にも男のプライドがある。任されたからにはやり遂げる自分を鼓舞する。

「よっしゃあ！みんな行くぞ！」

「「「おおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」

コウタの激励と共に中堅部隊の全員が突撃した。

すると前から誰かがこちらに走ってくる。

先攻部隊を率いていた秀吉だ。

「おう秀吉。大丈夫か？」

「うむ。戦戦死は免れておるが点数はかなり厳しいところまで削られてしまった。召喚獣ももうへ口へ口じゃ。」

「おっしや。ここは俺たちに任せてテスト受けなおして来いよ。」

「そうじゃな。全教科受けてる時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよう。」

そう言つと秀吉は教室に向かって走り出した。その後を先攻部隊の生き残りが続いていく。

そして入れ替わりにコウタたちが前に出る。

「げ、あいつら五十嵐先生に布施先生連れてやがる。科学で一気にけりつける気かよ。」

コウタは思わず顔をしかめる。

今回は学年主任を立ち合いに総合科目で勝負してたのだがこれでは時間がかかる。Dクラスは短期勝負に移行したようだ。

「なあ、島田。お前化学は？」

「全くダメ。60点台常連よ。」

「俺は今回50点台だ。こうなったら五十嵐先生と布施先生を避けて学年主任の所に行くぞ。」

「了解！」

行動しようとした瞬間。

「あ、そこにいるのはもしかや美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来てください！」

「くっ！ぬかったわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「ちょ、藤木助けて！」

「ああ、もうしょうがねえなあ！試獣召喚っ（サモン）！」

美波の前にコウタが躍り出るとそのまま召喚する。

幾何学的な魔法陣から出てきたのは露出の多い服に短パン、そして巨大な重火器を持ったコウタをデフォルメしたような姿の召喚獣だ。

Fクラス 藤木コウタ VS Dクラス 清水美春

科学54点

VS

94点

「おっしゃあ！初陣だ！いっちょ派手に……………」

コウタが奮起しいざ戦おうとすると、

「殺します…………美春とお姉さまの邪魔する人は全員殺します……………」

美春の凄まじい殺気に青ざめると美波を振り返り、

「交代しない？」

と提案した。

「いや！絶対いや！」

ものの見事に拒否られてしまった。

「ちくしょう！やってやる！死にもの狂いじゃコラア！」

そう言うとコウタの召喚獣は重火器―神機を乱射した。

「くっ！近づけな…………きゃあ!？」

乱射した弾は美春の召喚獣をうまい具合に足止めし、そして弾が足に当たり体制が崩れた。

「ナイスよ藤木！試獣召喚っ（サモン）！」

そこに美波が召喚獣を召喚する。

青い軍服にサーベルの美波の召喚獣はそのまま美春の召喚獣を切り倒した。

「おいなんだよ！いいところ取りじゃねえか！ふざけんなよ！」

「うっさいわね！細かいこと気にしないでよ！」

などと2人がぎゃいぎゃい口論していると、

「殺します……豚野郎は殺します殺しますコロコロコロコロ……」

美春が精神崩壊を起こした。

「ちよっ！美春！？」

「怖ええええええ！！鉄人！補修室一丁！」

コウタが悲鳴じみた声で叫ぶと、

「西村先生と呼ばんかバカ者！おお、清水か。勉強漬けにしてやるからこっちに来い。」

そう言うつと西村先生は美春を軽々と担ぎ上げた。

「お、お姉さま！美春は諦めませんか！このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！」

かなり危険なセリフを残しながら美春は補修室に連行された。

「島田・・・・・・・・お前厄介なヤツに目付けられてるな。」

「まあね・・・・・・・・」

コウタの隣で美波ははあ、と深いため息を吐いた。

第6問 Dクラス戦パート1（後書き）

最近気づいたことですが……俺意外と書くスピードが早い。

動画見るの少なくとも1週間無理でも2週間に1回はいけるかもしれません。

ではまた！

第7問 Dクラス戦パート2（前書き）

今回は明久が活躍します。他のみんなは・・・・・・・・次で活躍させます。

ではどうぞ！

第7問 Dクラス戦パート2

渡り廊下でコウタ達Fクラスの面子はどうにかこうにか戦っていた。

というのも、

「うわ、あぶね！おい藤木！ちゃんと狙え！」

「しかたねえだろ！まだ召喚獣の扱いに馴れてねえんだよ！」

後方から援護をしているコウタは正確な狙いをつけて撃つということがまだうまく出来ない。だから何度か誤射をしそうになっている。そのせいでうまく戦えていないのだ。

まあ、その乱射されている弾のおかげでDクラスの連中もうまく戦えてないのだが。

「藤木！助けてくれ！」

コウタが目を向けると、一人の生徒がやられかけている。

「ちっ！誤射しても怒るなよ！」

コウタはできるかぎり早く狙いを定めると、引き金を引いた。

弾は相手の召喚獣の頭部をうまく撃ち抜き、戦死にした。

「助かったぜ！藤木。」

「気をつけるよ。こんどわよ。」

「ああ……藤木！後ろ！」

その声にコウタが後ろを向くと、一人が切りかかってきている。

「くそ！」

コウタは撃ち抜こうと引き金を引くが、

「弾切れ！？」

銃口からは弾はでず、カチカチとむなしい音が響くだけだった。

「もらったぜ、藤木コウタ！」

相手の刃はもう目の前まで来ていた。

「くそ！ここまでかよ！」

コウタが目を閉じた瞬間、

「試獣^{サモン}召喚！」

その声と共に一体の召喚獣が相手の召喚獣を吹き飛ばした。

コウタが目を開くと、

「もっとしっかりしてよ、隊長さん。」

苦笑している明久がいた。

「明久！もう補充試験終わったのか？」

「いや、全部は終わってないよ。僕だけ早めに切り上げて援軍に来たんだ。なのは達は後から来るよ。それよりも早くリロードを。」

「おう。すまねえな。」

そう言つとコウタの召喚獣はリロードを始めた。

「ちつ、させるな！藤木の護衛は一人だけだ！二人まとめてやっちまえ！」

その声と共にDクラスの二人が明久達向かつて突っ込み、最初の一人が剣を振り下ろしてきたが、

「そんな単調なの当たんないよ。」

明久の召喚獣は懷に飛び込むと同時に木刀を突出し、相手の首に叩きつけ、吹き飛ばす。

更にもう一人の顎を素早く木刀でかち上げるとがら空きの胸を思いつき薙ぎ払い、吹っ飛ばす。

「な、何でだ！？何でこっちが一方的にやられてんだ！？」

「マグレだ！点数じゃこっちが勝ってた。一気にやっちまえ！」

そして更にDクラスの生徒が突っ込んできたが、

「させるかよ!」

リロードを終えたコウタの召喚獣が神機を乱射。弾幕で相手を足止めする。

明久はとっさに召喚獣をかがませて何とか回避する。

「ちょっとコウタ! 撃つならもつと早く言つてよ! 危なかったからね!」

「わりい、わりい。でも避けれてんじゃん。だったら良いじゃん。」

コウタはからからと笑いながら手を動かす。

「たくつ……よし! 行くよ!」

「おう!」

明久が突撃しようとした瞬間、

ピンポンパンポーン 連絡いたします

校内放送が突然流れてきた。

「この声って……横溝君?」

「そう言えばあいつちょっと前に教室に戻ってたなあ。」

二人が首をひねっていると、

船越先生、船越先生。須川君が体育館裏で待っています。

「・・・・・・・・・・はい？」

生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです。

「わああ・・・・・・・・」

二人は思わず感嘆の声を漏らした。

船越女史とは40歳をすぎてもなお独身であり、最近では単位を盾に生徒たちに交際を迫っている。その時から文月学園の男子生徒共通の要注意人物である。

「須川・・・・・・・・アンタあ男だよ！」

「ああ、感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

この場にいない須川に部隊の面子が感動にむせんでいる。なかには敬礼している人もいる。

どこからか「坂本・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」などという声が聞こえてきたが。

「まあ、いいや。コウタ改めていくよ！」

「おしゃあ！任せとけ！」

その声と共に明久の召喚獣は一気に先ほどの放送に気を取られていたDクラスの生徒一人を木刀で殴りつけ、一気にふつとばす。

「しまー」

「いまよ！集中攻撃！」

「「「おおおおお！！！！」」」

明久の攻撃でふつとんだ召喚獣を美波の号令でFクラスの面子がタコ殴りにする。

「よし。」

「油断したな！吉井！」

明久の召喚獣の後ろから別の召喚獣が切りかかってきたが、それを軽くよける。

そして攻撃が空ぶった召喚獣にコウタ召喚獣は狙いをつけ、引き金を引く。

弾は見事に相手の胴体を撃ち抜き、仕留める。

「やったね。」

「おうよ。」

明久とコウタはそう言うとお互い腕をぶつけ合う。

「よし、この勢いを維持するよ！全員突撃！」

「」「」おおおおお！！」「」

明久の号令と共にFクラスは更に攻め込む。

第7問 Dクラス戦パート2（後書き）

次でDクラス戦は終了させる予定です。

そろそろバカテストもやろっかなあと考えています。

ではまた次回！

第8問 Dクラス戦パート3（前書き）

結構早めに投稿できました。

今後もこのスピードをできるかぎり維持したいです。

第8問 Dクラス戦パート3

「アキ君！大丈夫！？」

「もうちょつと耐えて！すぐに行くから！」

「もう少しだけ持ちこたえろよ！」

渡り廊下でDクラスと戦っている明久達の後ろから援軍の雄二達の声が響いてきた。

しかし距離はまだあり、合流には時間がかかりそうだった。おまけに相手をかなり倒したとはいえ明久たちの部隊も結構減らされている。最初は18人だったのがいまの人数は5人。

「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅させるんだ！」

「くそ！このままじゃヤバイぞ、明久！」

コウタが焦りながら言う。

「コウタ。弾はどれくらいあるの？」

「そろそろリロードしたいな。」

「分かった。島田さん、コウタの護衛お願い。コウタは僕が隙を作るからその時にリロードを。」

「分かったわ。」

「おっしゃ、まかせとけ。」

そう言うと明久は前へ出た。

「吉井が一人で出ているぞ！やっちまえ！」

前に出てきた明久を仕留めようと相手が襲いかかってきたが、

「よいしょ！」

明久は召喚獣を低い姿勢にし、そのまま横っ飛びさせ、更に素通りする相手の召喚獣足をすくい転ばせる。

「（よし！ここだ！）ああっ！霧島さんのスカートが捲れている！」

「「「なにいつ!?」「」「」

明久がDクラスの背後を指差して叫ぶとDクラスの男子だけでなく、Fクラスの男子やDクラスの女子までも振り返った。

「よし！コウタ今のうちに・・・」

明久が振り返って見るとコウタはリロードをせず・・・Dクラスの後ろを見ていた。

「コウターーーー！！！！何で君まで反応してんのさ！意味ないじゃん！」

「いや仕方がねえだろ！いきなりそんな事言われたら反応するのが男だろ！真相知ってるお前は抜いてもよ！」

「言い訳だ！ていうかそんな事よりも早くリロードしてよ！」

本体同士がそんな口論をしながらもコウタの召喚獣はリロードを始めた。

「おい！藤木がりロードをしているぞ！早く倒しちまうぞ！」

コウタの行動に気づいたDクラスの生徒達はコウタを倒そうと一斉に襲いかかってきたが、

「させないよ！」

明久が先頭の召喚獣を思いっきり木刀で殴り飛ばすと後ろの他の相手にぶつかり、そのまま連鎖的に相手が倒れて行った。

「島田さん！」

「まかせといて！」

そして倒れた相手に美波が斬りかかり、一人を仕留める。

「みんなも行つて！ここであつこいいところ見せればなのは達に褒められるかもしれないよ！」

明久の言葉にFクラスの生徒は、

「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「！！！！！！」

一瞬で士気がゲージをぶっちぎり、凄まじい勢いでDクラスに襲いかかる。

「うわあ・・・自分で言っというてなんだけど凄いことになった。」

「そうね・・・」

その光景に明久と美波はそろって呆然と見ていた。

が、勢いは凄いのだがいかんせん点数に差があるため、

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川がやられたぞ！」

劣勢である。

そこに、

「おまたせ！アキ君！試獣^{サモン}召喚！」

「よしやあいくで！試獣^{サモン}召喚！」

「よし！リロードが終わったぜ！」

合流した援軍とリロードを終えたコウタが参戦した。

「くっ！ここは退くぞ全員遅れるなよ！」

「させないよ！」

撤退しようとしたDクラスの召喚獣になのはが光球を叩きつける。

「絶対に逃がすな！ここで一気に決めるよ！」

明久の号令に全員が攻めこもとした瞬間、

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Dクラス代表ー平賀源治率いるDクラス本隊が援軍に来た。

「Dクラス本隊だ！予想以上に早く動いたな。」

それもそうだろう。明久達の部隊は損傷を受けたが、明久とコウタのコンビで相手の戦力をかなり減らした。

「本体の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

「「「おおー！」」」

平賀の号令にDクラス本隊のメンバーは動いたが、

「「「させない（で）（ぜ）――！」」」

遠距離攻撃ができるなのは、はやて、コウタの3人が弾幕を張り、Dクラスメンバーの動きを封じる。

さらに相手が動いたおかげで平賀への道が開けている。

「チャンス！」

明久はそこを見逃さず駆け出す。

「向井先生！Fクラス吉井明久が」

「Dクラス玉野美紀、試獣^{サモン}召喚」

「な、近衛部隊！？」

勝負を仕掛けようとした明久の前に玉野が立ちふさがった。

「残念だったな、吉井明久君。」

平賀は勝ち誇った笑みを浮かべている。それを明久は忌々しげに見ていたが、ふっと片目を瞑った。

「そうだね。たぶんこのままじゃあ僕は君を倒せない。だから」

もったいぶった後、

「姫路さん、とどめよろしくね。」

「は？」

平賀が何を言ってるんだ、というような顔をしていると、

「あ、あの・・・」

その後ろから瑞希が申し訳なさそうに肩を叩いた。

「え？姫路さんどうしたの？他のクラスはまだ自習の時間だけど。」

「

「いえ、そうじゃなくて・・・Fクラス姫路瑞希、Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます。」

「はあ、どうも。」

「あの、えっと・・・さ、試^{サモン}獣召喚です。」

そのまま平賀も召喚獣を召喚、構えるが、そのまま瑞希の召喚獣の大剣の餌食となった。

そしてDクラス戦の決着が付いた。

第8問 Dクラス戦パート3（後書き）

リリカル側の召喚獣の攻撃は基本は光球を撃ち出す形になります。
数は自由ですが。

ではまた次回！

第9問 Dクラス戦後（前書き）

今回はちょっと時間がかかりました。

戦後対談です。いろいろ伏線があるかもしれません。

ではどうぞ！

第9問 Dクラス戦後

Dクラス代表 平賀源二 討死

「うおおおーーーーー!!!!」

その報せが届いた瞬間Fクラスからは勝鬨の聲が、Dクラスからは悲鳴が上がった。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで置や卓袱台とはおさらばだな！」

「坂本雄二サマサマだな！」

「ああ。やっぱりあいつは凄い奴だったんだな！」

「藤木に吉井もやってくれたよな！」

「姫路さん愛しています！」

「高町さん付き合ってください！」

「何かどさくさに紛れて告白が聞こえてきたけど!?断ります！」

「ガーーーーーン!!」

何やら関係ないのが聞こえてきてるが、代表の雄二や功労者の明久とコウタを褒め称える声が聞こえてきている。

「あー、まあ、そのなんだ。そう手放しでほめられると、なんつか。」

みんなから褒められて雄二は明後日の方を見ながら照れていた。

「だろだろ！？これが俺の本当の実力だぜ！」

「コウタ・・・ちよつとは謙虚になりなよ。」

それに反し、コウタは胸を張って鼻を天狗にしており、明久は若干あきれていた。

「まさか姫路さんがFクラスだったなんて・・・信じられん。」

その声に明久が振り向くとDクラス代表の平賀源二がヨタヨタと歩いてきた。

「あ、その、さつきはすいません・・・」

別の方向から瑞希が駆け寄ってきて源二に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることは無い全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラスでクラスメイトに恨

まれながら過ごす羽目になる。が、

「いや、その必要はない。」

雄二はその懸念を払拭した。

「何？」

「Dクラスの設備を奪うつもりは無いからだ。」

雄二の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが……いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

そう言っ雄二が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろうが悪い取引じゃないだろう？」

まあ、そうだろう。うまくやれば嚴重注意だけですむのだから。

「分かった。その提案を呑もう。」

「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰っていいぞ。」
交渉は成立した。

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ。」

「はは、無理するな。勝てっこないと思ってるんだろ？」

「はは、そうだ。FクラスがAクラスに勝てるわけがない。アイツが居るからな。ま、社交辞令だ。」

そう言つと源二は去って行つた。

「アイツ？誰の事だ？」

雄二はあいつと言う存在が気になったが分からないので頭の隅に追いやつた。

「さて、みんな！今日はご苦労だった！明日は今日消費した点数の補充を行うから今日は帰ってゆっくりしてくれ！解散！」

その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻っていく。

「私たちも帰ろうか。アキ君。」

「そうだね。」

「今日は帰ったらゲームやゲーム。」

明久たちも帰り支度を始めるために教室に戻っていった。

「明日は……補充試験をやって終わりかなあ。」

帰り道。フェイトは明日の予定を想像して呟いた。

「そうかもしれないけど……坂本君の事だから続けてか
もしれないね。」

なのはが推測を話すがなぜか全員その言葉に納得できた。

「そうか……だったらフェイト。勉強教えてよ。」

「え!？」

明久の申し出にフェイトはすつときよんな声を上げた。

「だったら私も教えてほしいな! うん!」

即座になのはが割って入ってきた。

「あ、それもそうだね。僕だけじゃああれだし、なのはとはやて
のもお願いできる?」

「う~~~~~~~~、……………うん。」

フェイトはしばらく唸ったがやがて諦めたように頷いた。

「はあ、アキ君はほんま鈍感やな。」

それを見ていたはやてはやれやれとため息を吐いた。

「それじゃあ……てありゃ？」

明久はここで鞆が妙に軽いことに気づき、中身をあさって声を上げた。

「しまった。教科書教室に置いてきちゃった。」

「ほんと？私の貸してあげようか？」

「いや、それはなのはに悪いよ。今から取りに行ってくる。先に帰ってて。」

「うん、分かった。それじゃあ先に行ってるで。」

「薄情だね、わが親友よ。」

「私は甘くはないで♪」

そして明久は文月学園に走って行った。

ガラッ「ふう、着いた。」

今まで走ってきたのに息一つ乱さず明久はFクラスに戻ってきた。

「よ、吉井君!？」

「あれ？姫路さん？」

もうみんな帰ったと思っていた教室に瑞希がいた。

「どどどどどうしたんですか!？」

「いや、ちょっと……………」

そこで明久は瑞樹が座っている席に目を向けた。そこには可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。

(あれって……………
……………かな?)
(……………ラブレター……………)

かなり間が空いたが明久はそう結論付けた。

(ふむ……………ここは……………
……………早めに用を澄まして
邪魔者は消えた方がいいね。)

「ちよつと教科書を忘れたから取りに來ただけだよ。」

そう言つと明久はさつさと自分の席に向かい教科書を鞆に詰めた。

「ごめんね、驚かせちゃって。」

「あ、いえ別に……………」

「それじゃあ僕はこれで……………」

そう言つと明久は教室を出て行つた。

（それにしても姫路さんには好きな人がいるのか。ここはクラスメイトとして応援した方がいいかな？まあ雄二だったらしないけど。）

そんな事を考えながら明久は廊下を歩いていった。

（それにしても……………好きな人か……………）

そこで明久の脳裏に一人の少女の笑顔が映つた。

「っ！／＼／＼……………もうちょっと。せめて……………
」
「クラス並みに勉強できないとね……………」

赤面しながら明久は呟くと早く帰るため走り出した。

第9問 Dクラス戦後（後書き）

こんな感じです。次回は・・・・・・・・ついにあれが出てきます。

果たして明久たちの運命は！？

ではまた次回！感想待ってます。

第10問 死の料理（前書き）

ついに・・・・ついにあの料理が・・・

はたして最初の犠牲者は・・・・

ではどうぞ！

第10問 死の料理

次の日。明久達Fクラスは午前中に補充試験を終わらせていた。

「うあー・・・づがれだー」

明久はテストの疲労から机に突っ伏していた。

「うむ、疲れたのう。」

近くに来ていた秀吉が頷きながら答える。

ちなみに今日は髪をポニーテールにしており、より女の子に見える。それを見た空は「本当に男と見てもらいたいのか・・・」と額に手を当てていた。

「まったくだよな。テストなんて疲れるだけだぜ。」

コウタも首をコキコキと動かしながら答える。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにするかな。」

雄二は疲れなど微塵も感じさせずに立ち上がる。

「あの、どれだけ食べるつもりですか。」

「坂本君はフードファイターでも目指しているの？」

「というよりもすでにフードファイター並のだよな。」

「と言うよりも炭水化物取りすぎや。栄養偏るで。」

上からアリサ、なのは、フェイト、はやての順に雄二の昼食内容にツッコんだ。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ。」

「それじゃあ混ぜてもらうね。」

「……………（コクコク）」

ムツツリーニが頷いているがおそらく下心があるだろう。

「それじゃあ、秀吉。俺たちは優子の所に行くぜ。弁当の食べさせ合いだ。」

「うむ、そうするかろう。」

そう言つと空と秀吉は包みを持って出て行つた。

「それじゃあフェイトにはやて。これ二人の分のお弁当……………」

「

「あ、あの。皆さん……………」

明久が二人のお弁当を取り出そうとしたところで瑞希が声をかけ

ていた。

ちなみに二人は昨日のうちに弁当交換の約束を取り付けていた。

「うん？あ、姫路さん。雄二たちと学食に行くの？」

「あ、いえ。え、えっと……お昼何ですけど、その、昨日の約束の……」

瑞樹はもじもじしながら明久たちを見ている。

「あ、もしかしてお弁当の件ですか？昨日の。」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞ。」

そう言うのと体の後ろからバッグを出してきた。

「迷惑じゃないよ。ね、雄二。」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

「そうですか？良かったあゝ」

そう言って瑞希はほにやっと笑った。とここで明久ははやてたちを振り返った。

「じゃあ二人はどうする？」

「もちろんついて行くよ。」

「お腹なら大丈夫や。アキ君のお弁当は別腹やからな。」

フェイトはニコツと笑い、はやてはお腹を叩いて笑った。

「・・・・・・・・・・食べ過ぎないようにしないと・・・・・・・・・・」

なのははポツリと小さく呟いているが。

「むー・・・・・・・・・・瑞希って意外と積極的なのね・・・・・・・・・・」

美波は親の仇のように瑞希を睨みつけていた。

「それじゃあせつかくのご馳走だしよお、屋上で食おうぜ。」

「そうだね。」

コウタの提案にみんなが頷いた。

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ。」

「へ？坂本君はどこに行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねな。」

「あ、それならうちも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「悪いな。それじゃあ頼む。」

「おっけー」

「そうだ、明久。きちんと俺たちの分を取っておけよ。」

「大丈夫だって。あまり遅いと保証できないけど。」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる。」

そう言うとき雄二と美波は教室を出て、一階の売店に行った。

「僕らも行こうか。」

「そうですね。」

瑞希が持っていたバッグを明久が代わりに担ぐ。

それなりの重さだが鍛えてる明久にはそれほど重くは無い。

そして明久たちは屋上に出た。天気は青空が見える晴れ。絶好のお弁当日和である。

明久たちはシートを用意して準備をした。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

瑞希が重箱のふたを取った。

「……おおっ！！」「」

明久たちが一斉に声を上げた。

中身はエビフライやから揚げ、エビフライにおにぎりにアスパラ

巻など定番メニューが詰まっております、凄くおいしそうに見える。

「それじゃあ雄二には悪いけど先にー」

「・・・・・・・・・・（ヒョイ）」

「おっさきーー」

ムツツリー二とコウタはさっさとエビフライを取ると口にはおり込んだ。

ボタン ガタガタガタガタ×2

2人そろって豪快に顔面から倒れ小刻みに震えだした。

「「「・・・・・・・・・・」」」

残った明久たちは顔を見合わせた。

「わわっ、土屋君に藤木君!？」

瑞希が慌てて配ろうとした割り箸を落としていた。

「・・・・・・・・・・（ムクリ）」

ムツツリー二が起き上がりグツと親指を立てた。

恐らくすごくおいしかったと伝えたいのだろう。

「あ、お口に合いましたか良かったですう。」

「は？何言ってるのあなた達は？」

優子は二人の言葉の意味が分からず首を傾げた。

「いや、わしらにもよく分からのじゃ・・・」

「まあ、とりあえず飯食おうぜ。」

そう言つと空は優子のお弁当の卵焼きを口に運んだ。

「うん。うまい。うまくなってんじゃん、優子。」

「そうかしら。やっぱり練習したかいがあつたわね。」

「空の料理も相変わらずうまいのお。」

その隣で秀吉が空のお弁当のから揚げをおいしそうに食べていた。

こちらは平和に昼食の時間が流れていた。

第10問 死の料理（後書き）

本当は一氣に行きたかったのですが文字数の関係と区切りよく終わったのでここで。

ふと思ったんですが硫酸とか使ったら食材が幾らかは溶けますよね。そこで気付かないのかなあ。

では次回は早めに上げようと思います。

第11問 終焉の笛（前書き）

はい、今回はかなり早く書き上げられました。

やればできるんだなあ。

まあ次回からはまた遅れますけど。

ではどうぞ！

第11問 終焉の笛

晴れ渡る空が見える屋上。

だがなぜだろう。屋上の一角はどう見ても曇天の空模様だ。

明久となのはとフェイトとはやてとアリサは顔を見合わせ小声で話していた。

「ねえなのは。あれと思う。？」

「どう考えてもやばいよね。演技にはとてもみえないよ。」

なのはがいまだに動かないコウタに足が震えているムツツリー二を見ながら言った。

「と言うよりもそんな演技をする必要がないよね。」

「アタシ、土屋さんがK O寸前のボクサーが生まれたてのバンビにしか見えません。と言うかコウタは大丈夫なんですか。全然動きませんけど。」

「まさか………シャルさんと同種の人なんか。瑞希ちゃんは。」

はやての言葉に明久、なのは、フェイトは顔を青ざめた。

はやては家が広いのでちょっとした寮として開放している。

家賃は月5万ほど。食事やお風呂はもちろん共同だ。今は3人の大学生が使っている。

そのなかの一人。シャマルと言う女子学生の料理は一口で意識を刈り取るほどの破壊力を秘めている。

現にそれを食べた明久たちは5時間ほどみなして意識を失っていたらしい。（シャマル談）

「で……これからどうします。」

アリサが聞いてきた。

「どうしますって言われても……」

「……よし、ここは僕が行くよ。」

明久が腹をくくった顔で立候補した。

「そんな！危険すぎるよ！」

「そうや！なにもアキ君が行かんでも！」

なのはとはやてが抗議の声を上げた。

「そうは言ってもこの中で一番体が頑丈なのは僕なんだよ？だって僕が……」

と……

「おう、待たせたな。へーこりやうまそうだな。どれどれ？」

雄二が現れそのまま素手で卵焼きを素手で掴み口にほおり込んだ。

「あ、坂本くーーーーー」

パク
タガタ
ボタンーガシャンがシャン、ガタガタガタガ

ジュースの缶をぶちまけながらこれまた豪快に顔面からぶっ倒れ、
痙攣しはじめた。

「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

遅れてやってきた美波が慌てて雄二に駆け寄った。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

明久たちが無言で顔を青ざめながら雄二を見ていると本人が彼ら
を見て目で訴えてきた。

「毒を盛ったな」と。

「毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ。」

それに対し明久も目で返事をした。

「あ、足が・・・・・・・・・・攣ってな・・・・・・・・・・」

瑞希を傷つけないように嘘をついた雄二だがそれを見たアリサは

顔をしかめた。

「あははは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな。」

「そうだね、うん。」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど。」

「いや美波ちゃん。鍛ええても攣るときは攣るもんやで。」

美波の言葉にはやてがそう答える。さてこれからどうするかと事情を知っている4人が考えようとした瞬間、

「それじゃあ瑞希さん。いただきますね。」

アリサが衝撃発言をした。

「あ、はいどうぞ。」

「ちょ、ちょっと待って！」

なのはが慌ててアリサを捕まえた。

「アリサちゃん何言ってるの！？坂本君のとか見てなかったの！？」

「見てましたよ。だからほんのちよつとつまむ位で済みますよ。」

なのはの言葉にアリサはすまし顔で答えた。

「で、でもかなり危険じゃあ。」

「そうかもしれません。ですが誰かが行かないといけないならあたしが行きます。素直に感想も言えますしね。」

「素直って……不味いつていうの？」

「当たり前ですよ。」

アリサは当然という風に答えた。

「でも、それって姫路さんが傷ついちゃうんじゃない……」

明久も会話に入ってきた。

「何言ってますか。ここで不味いつて言わないとこれからもあるを作ってくるんですよ？人は傷ついていくことで強くなるんです。」

明久はそう言い切るアリサがとてもカッコよく見えた。

「では………行きます。」

そう言うたアリサはお弁当に向き直ってはしで卵焼きのほんの端っこをつまんだ。

「あれ？アリサちゃん食べる量すくなくないですか？」

「あ、アタシ小食なんで！」

量を不思議に思った瑞希の言葉にアリサは慌てて答えた。

そしてアリサはしばらくじっと卵焼きを見ていたが決心がついたのか口に入れた。

その瞬間、

「!？」

口を押えて後ろの倒れた。

「あ、アリサ!？どうしたのよ!？」

突然倒れたアリサを心配して美波が駆け寄る。

「!、!、!!」

そのまま口を押え、バタバタと足をアリサはばたつかせた。

足が動くたびにスカートが捲れるがアリサはそんなの気にしてられない。ちなみにムツリー二はどこからともなくカメラを取り出し写真に収め、雄二は未だ回復しきれていないので見る余裕なし。明久ははやてが目隠ししていた。胸を当てるといったずらのおまけつき。

そしてしばらくしてアリサの動きが止まり、弱弱しく起き上がった。

「アリサ、大丈夫？」

「な、なんとか大丈夫です。お気遣いありがとうございます。」

アリサは心配してくる美波にお礼を言つと瑞希に向き直つた。

「すいませんが瑞希さん。言わせてもらいますが、」

「は、はい。」

「……恐ろしく不味いです。」

アリサの言葉に瑞希はショックを受けた顔をしてうなだれた。

「ありえませんよ。あの量で意識を持ってかれかけるって。いったいどんな材料を使えばあんな味が……」

「……わかりました。」

「はい？」

「これからアリサちゃんに認めてもらえるように毎日お弁当作ってきます！」

「前言撤回。すごくおいしかったです。改良の余地は一切ありません。このままの味を維持してください。」

まさしく前言撤回を表しているさまである。

「あ、そうですか。よかったです。」

そしてあっさりと信じてしまった瑞希嬢。

「「「アリスアーアー！！」「」」

明久たちがアリスに詰め寄る。

「無理です！無理です！あんなの毎日食べさせられたらアタシ死んじゃいます！」

目に涙を貯めてフルフルと首を振るアリスを見て明久たちもこれ以上追及できなかった。

「いや、そもそも瑞希ちゃんこれ何を入れたの！？」

なのはが根本的な事を聞いた。

「あ、はい。卵焼きにひと工夫入れたいなあと思ひまして……」

「

「思ひまして……」

「硫酸を入れたぐらいです。」

次の瞬間どこからかブツ！と何かが飛ぶ音がした。

「なあ、瑞希ちゃん……ちょっとこっち来てくれへん。」

はやてがゆらりと立ち上がって手招きした。

「？、はい。」

それに素直に従い瑞希ははやてについて行った。

そして2人はそのまま屋上のドアのある部分の裏に消えて行った。

「はやてちゃん。どう考えてもOHANASHIする気だよね。」

「うん。そうだね。」

「まあ、今回は瑞希の自業自得……」

次の瞬間、

「響け！終焉の笛！ラグナロク！！」

「きゃああああああああああ！！」

極太の閃光が空に向かって伸びた。

「「「！？」」」

その場にいた意識があるもの全員が思わずギョッ！とした。

「硫酸てなんや硫酸て！あんた料理舐めとんのか！ええ！？コラ
！」

半ばヤンキー口調になりかけているはやての怒声が聞こえてきた。

それを聞いた全員が決心した。

なにがあってもはやてだけは本気で怒らせまいと。

第11問 終焉の笛（後書き）

さて今回はゴッдойターの執筆にかかりますので遅れます。

でもできるかぎり早くするように努力はします。

では次回！

第12問 次のプロセスと新コンビ

「そういえばよお雄」。次の目標。」

「ん？試召戦争の事か？」

「おう。」

地獄の昼食を乗り越え、明久たちは今お茶をすすっている。ちなみに意識を取り戻したコウタはがぶ飲みしまくっている。お茶には殺菌作用があるらしいので。硫酸の前には意味ないだろうが。

ちなみにあの後はやては意識を失った瑞希の首根っこをつかんで引きずりながら戻ってきてみんなに恐怖を覚えさせた。

その瑞希も今は意識を取り戻しているが。

ちなみにお昼は明久たち4人のをみんなで分ける結果になった。

「相手はBクラスか？」

「ああ。そうだ。」

「どうしてBクラスなの？僕らの目標はAクラスでしょ？」

明久たちの目標はAクラスだ。だからこそその疑問だろう。

「正直に言おう。どんな作戦でもAクラスには勝てやしない。」

雄二は神妙な面持ちで言う。

「え？なんで？こつちにはフェイトやアミエーラさんに空、何より姫路さんがいるんだよ？」

「いや、アキ君。いくら私でもAクラス、それも上位の人相手だと厳しいよ。」

「アタシもです。そもそも、Fクラスの他の戦力の人たちの事を考えるとAクラスの大半をアタシたちで相手することになりますよ。」

アリサの言葉に明久はあ、そうか。というふうな顔をした。

「それじゃあウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや。そんなことはない。Aクラスをやる。」

「雄二、さつきと言ってることが違うじゃないか。……まあ、そうならないと困るけどね。」

美波の質問に雄二は答え、その答えに明久が間に入る。しかしその後の言葉は誰の耳にも入らなかった。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ。」

「え、一騎打ち？」

その言葉に明久は少し驚いた顔になった。そしてその顔には何か

別の感情が入っているように見える。誰も気づいていないが。

「一騎討ちに？どうやってだ？」

「Bクラスを使う。」

「Bクラスを………ですか？」

「アミエーラ、試召戦争で下位クラスに負けた場合の設備はどうなるか知っているな。」

「はい。下位クラスは負けたら設備ランクを一つ落とされるんですよ。」

「ああ。では上位クラスが負けた場合は？」

「確か相手クラスと設備を入れ替えさせられるんですよ。」

「ああ、そのシステムを利用して交渉する。」

「交渉？」

「Bクラスをやったら設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだがAクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。必ずうまくいくだろう。」

「ん、それでどうするんや。」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に

攻め込むぞ』と言った具合にな。」

「なるほどね。」

さすがのAクラスといえども学年2番目のBクラス戦後、休む間もなく戦争ではきついだろう。

更にFクラスは今の設備にたいし不満を持っているためモチベーションは高い。しかしAクラスは勝っても何も得られないためモチベーションは低い。

そのことは明久も分かっていた。しかし彼にしか分かっていないことがある。

確かにAクラス全体のモチベーションは低いだろう。たった一人を除いては。

「でもよお。Aクラスは確実に勝つために全体の戦争をやつてくる確率が高いぜ。それにー」

「それに？」

「そもそも一騎討ちにで勝てんのか？姫路がこっちにいることはばれてるからよう。」

Dクラス戦のことで瑞希がFクラスにいることはすでに周知の事実だろう。ならばAクラスは必ず瑞希対策を練ってくる。

「そのへんには考えがある。心配するな。」

みんなが抱いている不安とは対照的に雄二は自信満々だった。」

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後だ。で、あ、待ってください。坂本さん。」ん、なんだアミエーラ。」

雄二の言葉を遮りアリサが入ってきた。

「Bクラス戦なんですけど……アタシを明久さんと組ませてください。」

「「「はあ?」」」

アリサの言葉に一同目を丸くした。

「どうしてなの?アリサちゃん。」

なのはが聞く。そして美波と瑞希が軽く殺気を出しながら明久を睨んでいる。下手な答えは即彼の死につながる確率大だ。

「はい。アタシ、点数は良い方なんですけど、操作の方が少し苦手なんです。ですから明久さんに教えてもらおうと。教えることができますなくてもうまい人のをまじかで見て練習をしたいんです。」

アリサの言葉にみんなが納得したように頷いた。

「だそうだけど、どうするの?アキ君。」

フェイトが明久に向き直って聞く。ちなみにあの二人ははやてとなのはが牽制している。

「そういうことだったらいいよ。役立つかどうかは分からないけどね。」

明久は快く承諾した。それと同時に美波と瑞希が立ち上がりかけたがすぐに幼なじみ2人に押えられる。

「はい。ではよろしくお願いしますね。明久さん。」

「うん。よろしく、アミエーラさん。」

ここに新しいコンビが誕生した。

ちなみに宣戦布告は最初明久にやらせようとしたがなのは達の殺気で雄二本人が行った。

第12問 次のプロセスと新コンビ（後書き）

最近残業が多く疲れています。だれか俺に癒しを（泣）

だけどもげずに頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1971t/>

バカとリリカルとゴッドイーター

2011年9月28日13時28分発行